

# 会報

## みちらびき

平成7年11月  
第60号  
東京都公立学校  
情緒障害  
教育研究会

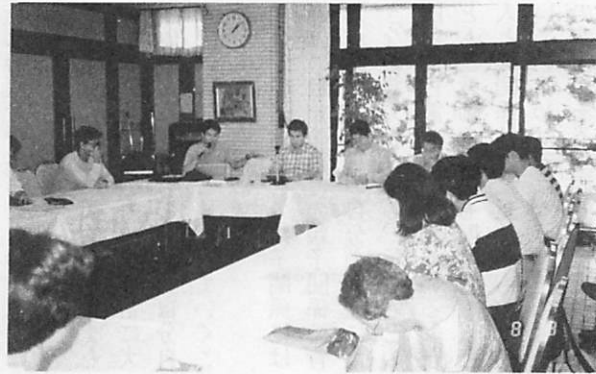
### 都情研夏季宿泊研修会 『これからの情緒障害教育のあり方』

猛暑の中、都情研の夏季宿泊研修会が催され、有意義な三日間になりました。以下に講演、分科会の要約を掲載します。

#### ※ 講演 演 ※

#### 『自閉症のライフスタイル』

東海大教授 小林 隆児 先生



・教師というのは人間の健康的な部分をどう引き出していくのかについて非常に鋭い人たちかと思ってきましたが、子どものできない部分を一生懸命見て、健康な部分が見えなくなっているんじゃないかという気がする。子どもは自分の一番健康な部分、自分らしい部分を相手から認められて、エネルギーが発揮されるが、それを引き出す能力に長けた教師が少ないような気がする。

・ある課題ができるようになったら次の課題というようなエンドレスな課題学習中心の指導では自閉症の人の発達は見えてこない。大人になったときに自立した生活、自

分の判断で自分なりの喜びをもちながら生活していくという姿を目標にした場合、課題達成という構造の中で理解する事が望ましいのか疑問を感じる。

・子どもの実態把握について三つの軸に分けてとらえることができる。第一の軸は医学用語で言う「現在症」といわれるもので、人のありのままの姿を客観的にとらえること。第二番目の軸はその人の歴史を知るといふか「家族歴」とか「生活史」といわれるもの。第三番目の軸はその人と身近に接して関わりの中で初めて感じとれるもの、ある種の感動といわれるものである。しかし、学校の先生方は一番目の軸は徹底して検討し、詳しくまとめられているが二番目、三番目の軸については子どもを理解する際に、ほとんど活用されていないように思われる。これは教育だけではなく今日、科学的とされている学問の流れが、一番目の客観的世界の把握が重視されているためである。第三の軸はその人と直接関わる中で初めて感じられるもので主観的とも言えず、客観的とも言えない世界、間主観的世界といわれるものである。すぐれ

た教育者や臨床家は間主観的世界を鋭くキャッチして、相手に対して強い影響を与えている。すばらしい感性の持ち主に会って強い影響を受けてそれが生きる力になっている。この三つの軸をバランスよくもってほしい。

・家族からの情報を得るには通級制度というのは比較的やりやすく、理想的なものが追求できる。情報収集自体が治療的な営みで、相手との共同作業の中で生きた情報になっている。生きた情報とは家族の思いを理解していくことである。自閉症の子どもは自分の意志、感情、思いをもって行動したり判断するのができにくい存在なので周囲の人の関わりによって受ける影響が強い。だから、自閉症と呼ばれている子どもを理解するためにこの家族からの情報は大切である。情報を得るといふのは一方的な営みではなく共同作業の中で初めて生きた情報が得られるので考えながら、想像しながら話を聞き、だんだんイメージが膨らんでくるように話を聞くことである。それは相手にとって良いインパクトを与えるような形でやる必要がある。間主観的世界で展開していく中身

とは治療者が感じたものを前面に出していく作業の中で浮かび上がっていくし、人を直接的に動かすものは情動レベルのものが非常に大きい。そういうものを極力自身自身で問題にし、言語化していくことが生きた情報になる。

・自分の子どもとの親子関係には過去に自分の親との親子関係の背景があり、今日の自分の存在に大きな影響力を及ぼし、子どもとの関係に色濃く反映されている。子どもと教師の関係も同じで、人と人との関係は目に見えるもので動いているわけではなく、その両者の背後にある主観的な世界が大きな力を持って動いている。

・この点について悪戦苦闘したある自閉症（A子）のケースから学んだ点を話した。面接を続ける中で、お母さん自身の話をするようになり、自分の生い立ち失意体験を語るようになる。そういう過程の中でA子の行動が和らいできた。A子の現在の状態にお母さん自身の思春期発達が関係し、A子が思春期を迎えた時の親子関係に如実に反映されている。これは世代間伝達というものでどんな子どもも育てる場合にもでもあることであ

る。自閉症の人のライフサイクルを考えた時どうしてもその人と関わる人間の存在というのを抜きにしては考えられない。三年間という長い治療で終盤にさしかかって初めてお母さん自身の中から過去の生々しい歴史が明らかになってきた。治療者との共同作業が行われて初めてA子とお母さんとの本来の心のつながり、人と人との望ましい関係を持つことができるようになり、A子の症状が急速に改善してやっと前向きに歩み出す力がわいてきた。本来ならば我々が発達に問題のある子どもに接する場合、子ども自身の自発性とか生き生きとした力を引き出す環境を作っていくことが請われているが、現実にはこういう関係は容易にはできない。

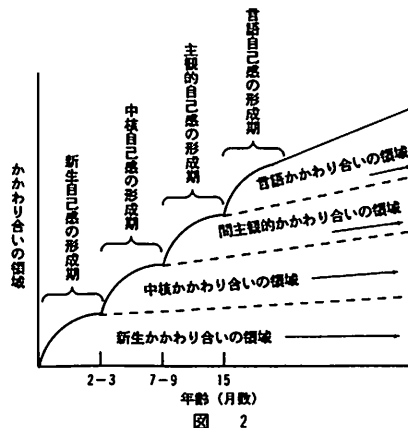
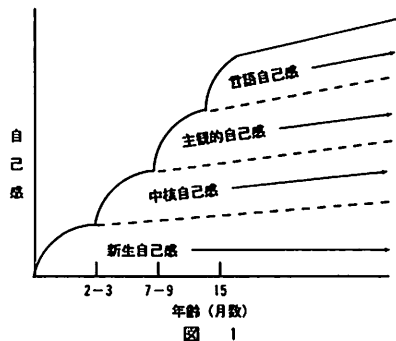
・人と人との関係の中で主観的な世界というのが繰り広げられているが、(間主観的世界という)例えば母親であれば自分と夫との関係、自分の親との関係、その他いろいろな文化的な影響や価値観が様々な形でその人の主観的世界が構成されている。それは赤ん坊との関係の中に非常に色濃く反映されている。我々がめざそうとして

いる人と人との情緒的な交流というのが可能になっていくには、背後にいろいろな形で影響を及ぼしているものから自由になることである。

・コミュニケーションの発達というの、情動の共有と観念のやり取りという二つの側面から見ると必要がある。情動の共有というお互いの気持ちを通じあうような関係というものを作っていくためには自分自身の主観的な世界を構成しているものからいかに自由になれるかにかかっている。

・自閉症の病理をどういうふうにか考えるか。人間の発達を自己感(スターン)の発達でとらえていく。人間の自己感というものは自己というものがどういうものか、どういうふうに出上がっていくかと考えればよい。自己の発達というのには新生自己感、中核自己感、主観的自己感、言語自己感というように重層的に展開している。自閉症の場合は新生自己感を持って膨らんで育っていく段階に問題がある。中核自己感とは自分らしさということであり、それは子ども

との一体感を積み重ねていく中で、広がっていく。中核自己感が非常に脆弱で貧弱な場合はいろいろな課題を植えつけても生きる力にならない。



注：図1、2ともにスターン著「乳児の対人世界」(小此木、丸田ら訳)より引用

### 学級経営分科会報告

八丈町立大賀郷小学校 上山 雅久

この度の分科会では、講師として教育庁指導部指導主事 砥柄敬三先生をお招きして、計十六名で話を進めていきました。また、多摩教育研究所教育相談研究室指導主事 水野薫先生が、お帰りの際のお忙しいなか砥柄先生が到着される前まで残ってくださいました。まず、学級紹介をかねて各校で抱えている学級経営上の問題について話し合いました。

小人数学級からは、小集団指導の体制が取れないことによる指導上の問題が出され、水野先生よりご助言をいただきました。

他に○週8時間枠の問題、○在籍担任や保護者の高機能の自閉なD・IQが高い児童理解に関する問題(教科指導を望むが問題点はそのではない)、○三者面談(保護者、在籍担任、情緒担任)は有効か、○専門家(作業療法士、音楽療法士、心理カウンセラー、聴能言語士、医師)との連携について、○巡回指導について、○校務分掌上の問題など、共通した問題や各学級独自の問題について真剣な議論が交わされました。

砥柄先生からは、

・週五日制の土曜日の問題は、そのうちには決着がつくのではないか。それまでは、変則的なやり方でやるしかない。学級によっては、個人面談やケース会議、講師を招いての研修を行っているところもある。

・LDや高機能児の親などからは、小学校や中学校では教科指導の充実にこだわっていたが、高校などで進路を考えるとよくなって、もっと社会生活を営む上で必要な指導をやってもらわなければならないと後悔したということをよく聞く。早めに将来を見通して考えるための情報提供をしていく必要がある。目の前のことだけでなく、先を、見通した個別指導計画が重要である。

・三者面談については、それができる条件があるか、保護者や担任が素直に受け入れる基盤があるかどうか、状況を見ながら個別に考える必要がある。本音をどこまで出せるかを考えること。内容によっては、三者面談が効果をあげることもある。  
・教育課程の届け出については、区市町村の教育委員会からは各小中学校にどのように伝わっている

かで様々な誤解が生じている。

・巡回指導では、在籍校との連携はより重要になる。超過勤務の問題や交通手段の問題など制度的な面でスタート時にはっきりした方がよい。

また、個別指導計画について各学級で作成しているものを持ち寄って話し合いました。

中でも淀橋第一小学校の個別指導計画では、在籍担任が中心となって作成したものがあり、砥柄先生からは、画期的であると評価されました。ポイントは、在籍担任も加えた個別指導計画作成連絡会ではないかとのことでした。

個別指導計画はいろいろな形があってもよい。過重な努力を強いることのない継続性のあるものを工夫していくことが重要。また訂正していける余白のあるものであった方がよい。まずは子供の課題を拾い出していくことから、といった助言がありました。

各学級での工夫や学級経営上の課題の解決の仕方などを知ることができ、とても有意義な研修会でした。

### 学級経営分科会に参加して

新宿区立淀橋第一小学校 市川 順子

四月に、情緒障害学級の通級学級に転動した私にとって、夏季宿泊研修会は、もちろん初めての参加でした。「温泉につかりながらのんびり話を聞いてみよう。」と出かけましたが、講演、分科会、実技研修等々どれも充実した内容で、たっぷり学習しました。

私の参加した「学級経営」の分科会では、学級の実態、悩み、疑問等、みんなで出し合い、話し合いました。私も日頃から感じている事で、アドバイスしてもらい元気づけられました。

分科会の時間があっという間に過ぎ、充分討議できなかったのが残念でした。その続きは、夜の交流会で活発に行なわれました。

「情緒障害学級」が、各区市に単独設置がほとんどという現状では、「都情研」が、情報キャッチの重要な役目を果たしている事を痛感しました。

また、各校の実態が違う中でも「一学級八人〜九人ぐらいにほしい。」という意見がありましたが、本当にそうなるといいですね。

## ※指導事例分科会報告※

茨谷区立茨谷小学校 工藤 哲士

今年度の指導事例分科会は、例年とは違う形で行いました。例年は、合宿前に事例発表担当者を決めておき、質疑応答していました。今年は、まず三つの小グループに分かれ、各学級の紹介、及び指導等においての問題点や悩みを出してもらい、話し合いをしました。そして、各グループで、討議した事例の中から代表を決め、最後に全体で討論をするという形を取りました。指導講師として、目黒区五本木小の高橋晃校長先生、東海大学の小林隆二先生をお招きして会を進めました。

全体の討論会では、四人の先生が事例を発表しました。それぞれの児童の実態、及び討論の内容は、以下の通りです。

A児は、注意欠陥多動で発達の遅れがある児童。五歳まで外国で過ごしている。からだがかぐにかぐにやしていて、歩き方などぎこちなく見える。鉛筆・箸をうまく持てない。字や絵もうまく書けず、数の概念も育っていない。学習について意欲はあるが能力的に難しく、できないことがわかってしま

う。緊張をいやがる。

他人と比較しないよう個別指導だけを行い、ある程度できたら小集団に戻せばよい。筋緊張に問題があるのではないかと。

B児は、てんかんの児童。兄は喘息を抱えている。保護者は、過去の経緯から医療に対する信頼を失っていて、本児をてんかんであると思いたくない気持ち強い。そのため、医療ケアを全く受けていない。現在もけいれんを自宅でおこしている。集団行動がほとんどできず、着替えも遅い。

母親に自分の方を向いてほしいという、仮性けいれんを起こしているのではないかと。親から親の助言（グループカウンセリングなど）が有効ではないかと。

C児はてんかん、精神発達遅滞の女子、母子家庭。兄も不登校。母親自身はからだに弱く仕事も休みがちで、カウンセラー施設で相談を受けている。教育委員会から、担任が固定心障学級への措置替えを進めるようにと言われている。

福祉的な手だてを考えた方がよく、それらを見通した助言が必要である。通級の担任が表にたつて言うのではなく、在籍校の学校長

を通して、各機関の人たちと連携していく必要がある。

D児は、注意欠陥多動と自閉的傾向の児童。多動で場に応じた行動ができず、唐突に他人を傷つけるなどの問題行動を起こす。衝動性を抑さえるための服薬をしている。本児の幼少期、祖母の死のショックのため、母親は子どもが悪さをしても叱れないなど子育てに自信を持っていない。

愛着形成が問題なのではないか。母親の祖母の死の悲しみを理解した上での、母親自身の指導・助言が必要。専門家へのカウンセリングを受けることもよいだろう。

今回は、特に保護者の問題が中心になりました。障害児の親が悩んでいるとき、応援を受けることは決して恥ではないことを伝えたり、同じ悩みを持った親から指導を受ける場面を設けたりなど、障害児だけでなく親も含めた援助の重要性を感じました。また、医療・福祉・教育の専門用語などを理解することを通して、各機関の連携を深める必要があるということも、これからの重要な課題であると思いました。

## 指導事例分科会に参加して

江戸川区立本一色小学校 青柳 京子

情緒障害学級の担任になって、二年目の夏、初めて都情研の夏季宿泊研修会に参加させていただきました。事例研究を三つのグループに分けたので、司会者と助言者も含めて、六人の小人数の中で話し合いが持たれました。現在、各々が抱えている問題を、詳しく話すことができ、又、聞くことができ、更に助言を受けられたことが、大きな収穫でした。

三つの事例の中で、特に保護者とのかわり方について出された事例が二例ありました。「親のあるべき姿とは」「親と子の関係はどうあれば」「母親の不安」等の問題に、一つ一つの現象を正確に捉えることができるこちらの感性が大事であると教えられました。

日々の教育活動を進めていく上で、行政面、社会面に精通し、問題が起きた時に、どのような機関と連携できるか、広く知識を求めていくという話も印象的でした。水上での研修は、他校の先生方と話す機会の少ない私にとって、大変興味深く、楽しく参加でき、意義深いものになりました。

## ※まとめの会※

都指導部心身障害教育指導課

指導主事 砥柄 敬三 先生

・通級による指導体制の見直し  
通級の制度化を契機に通級による指導体制の見直しが必要である。特に一人の子供の教育に関して各方面が連携をとりながら行い、その中で通級指導学級はいろいろな機関との調整役を担う必要がある。

・個別指導計画の意義

指導の継続性を考慮した場合、一人の子供に関する指導計画を明記することは大切である。今後、個別指導計画があることが当然の時代となるであろう。

・学習障害（LD）について

今年の三月に学習障害について、文部省の中間報告が出された。それを受け東京都では、理解啓発資料の配布、教員研修の設定、相談の場の拡充という三点について対応する方針である。早速、教育庁指導部心身障害教育指導課日より「Growing Together」特別号で、学習障害（LD）児の理解と指導というテーマの資料が配布された。また都内三つのLD親の会から、区市教育委員会におけるLDに対する対策と理解の向上、LDのた

めの学級の設置、指導法の研究、社会自立に向けた人間教育という要望が提出された。

今後の課題

私見ではあるが、継続性のある研修会の充実、就学指導の見直し、個別指導計画に基づく教育、T・Tによる指導方法の研究ということが課題としてあげられる。

東海大学教授 小林 隆児 先生  
子供の理解と研修

本研修会を通じ、情緒障害学級で日頃どのような子供たちと接しているのか理解できた。各学級で問題としている子供たち共通点があるようだが、これまで行われてきた自閉症中心の方法と異なった視点が今後必要となる。その際、人間理解の根幹に何が必要かとらえた上で、各論の研修を積むことがベストである。単に一方からの研修のみに頼り、子供を理解しようとする、それが逆に子供にとって凶器となってしまう。

人と人との関係と病態

これまで自閉症の子の治療教育を行ってきた。大切なことは「人と人との関係」を踏まえ理解すべきということである。なぜならば、自閉症の病態はその子そのものの

要因のみで成り立っているわけではないからである。自閉症の典型的な病態は早期療育により軽減できることからわかるように、こちらの心の状態が子供の状態を規定することがある。そのため、逆に副次的に問題を肥大化させていることもあり得るのである。

寄り添う気持ち  
教えようとする態度では良い関係を築けず、何も問題が解決しない。寄り添う気持ちが関係を変え、

子供の自発性を引き出すことができる。子供自身にどのような障害があるのか、そればかり取り出す作業をしていると、本来の関係が見えなくなってしまう。既成概念にとらわれず、乳幼児の発達研究を踏まえることで、援助の方向が見えてくるであろう。

目黒区立五本木小学校長

高橋 晃 先生

・三十七年十一月の教育生活

昭和四十七年までの都内の情緒障害学級は六学級あり、学級間での情報交換の場があった。その後、昭和四十八年以降にできた学級も含め、宿泊研修会が始まった。この頃は確かなマニュアルがなく、逆に魅力的な世界であり、指導主

事を何人も輩出した時代でもあった。また、昭和四十年代の渋谷区が都情研発祥の地であり、そこから毎月研究会のお知らせを千五百校に送付していた。しかし、参加者は毎月五名程度であった。このような時代を経て、来年三月に三十七年十一月の教職生活に幕を閉じる。思えば、このような都情研および自閉症の子供たちに自身自身が教育され、今まで教員を続けることができたのである。

孫から学ぶ

孫と付き合うと教えられることが多い。八か月の早産だった孫に対し、最先端の医療は専門性を生かし適切に対応してくれた。教育の専門家である我々もそうあるべきである。また、赤ちゃんと母親が触れ合うことで、母親が赤ちゃんをつくり、赤ちゃんが母親をつくるということに気付かされる。現在、一方的に親の都合で触れ合う機会が選択されていることが多いが、赤ちゃんの都合で母親が必要な時期もあるのである。さて、四月からは福祉の世界に入る予定である。立場を生かしネットワーク創りを行いたい。

## ※全情研「大阪大会」に

参加して※

三鷹市立羽沢小学校 山邊 令子

猛暑の中、参加者の熱気もあふれる全情研「大阪大会」に参加させて頂きました。講演、講座、分科会とも充実した内容で、指導する者への示唆に富み、通常学級担任である私も、多くのことを学ぶことができました。

参加した第五講座では、「発達遅滞児の機能的コミュニケーション行動の形成と促進をめざして」と題し、講師の藤原義博先生が、互いに理解し合えるコミュニケーション行動の獲得までの道すじを、理論で整理され、ビデオで実践を示され、密度の濃い講義をして下さいました。この講座で印象に残ったのは、「伝達技能の向上よりもまず伝達機能を重視する」という事でした。まずわかる伝え方をすること。それには、その子がどの機能で理解し得るのかを見極めること。そして伝達手段を工夫すること。等々。

現在、私は言葉のある子に向かっていますが、言葉に頼り、わからなければ、更に多くの言葉を費し、益々混乱させてはいなかった

だろうか。温かい目と鋭い感受性をもってその子の理解可能な伝達機能を見極め、ふさわしい手段を工夫することの大切さは、健常児にとっても同じなのではないか。

そんな思いを新たにしました。また、コミュニケーション技能形成の為に重要な、「わかるという体験をさせること」「自分から表現させること」「日常の動作の中に表現の機会を作ること」等も、障害の有無に拘らず、豊かに生きる力をつける上で、常に配慮すべき過程であると理解しました。

学習障害の分科会では、助言者の友久久雄先生の「問題点を明らかにすることは必要だが、教育的な関わりとは、できること、よいところを見つけ伸ばすことだ。」というご助言が、今更ながら、大変心に残りました。

専門外の私には難しい部分もありましたが、子供を理解し、指導・援助をする上の原点を学べた様に感じました。子供達を集団として捉えつつ、個を生かす関わりのある方を課題に、学んだことを生かしていきたいと思います。

関係の方々に深く感謝致します。

三鷹市立南浦小学校 中村 操  
(ことばの教室)

河合雄雄先生の講演をはじめとして多彩な内容に魅かれて、全情研「大阪大会」に参加した。

これまでにくさんの人々と深く関わってこられた河合先生のお話は素直に心にしみるものがあつた。特に、「受容すること」についてのお話は印象に残っている。

「・・・本当に受容するというのは難しい。私たちにできるのは、自分にできる範囲で受容すること。そして、すべて受容することはできないけれど、次に何ができるかを考えることはできる。・・・。」と「共に居ること」の意義について、わかりやすく語りかけて下さった。私たちが日々、子どもや保護者と関わっていく上で、大切な指針を示されたように思う。

二日目の講座は、河合伊六先生の「不登校を考える」に出席した。行動療法の立場で、系統的脱感作の技法を用いて登校を促す取り組みについて詳しく説明があった。子どもの立場に立って細かいステップで、具体的な行動計画を立案したり、登校してよかったという思いを体験させるよう工夫したりす

るという考え方は実践的で勉強になった。

分科会は「通級指導を考える」というテーマで、神戸と福井の先生から発表があった。

前者は、通級指導を特別な指導と考えず、全職員の意識を「どの子も援助を必要としている」という共通の意識に改革することから出発している。これは、非常に困難であるが画期的な取り組みではないかと驚かされた。一方、福井の先生は一人で多様な問題を抱える子どもたちの指導に当たってきた二年間を振り返っての発表であった。様々な問題点を明らかにすることで、これからの通級指導教室を発展させていきたいという思いがこめられていた。二つの発表を聞いていて、ひとりひとりの子どもにも応じた援助を行うためには、教職員の意識を柔軟にすること、現在通級というシステムで指導を行っている難聴、言語、情緒の連携が必要だと痛感した。

（編集後記）

宿泊研修の報告を中心に「みちびき」六十号をお届けします。原稿を引受けてくださった先生方ありがとうございました。へ広報部